愛
社会福祉法人　神戸真生塾
題字　斉藤　敬好

第18号
2011年　3月1日
○発行
650-0004
神戸市中央区中山手通
7丁目25-38
神戸真生塾広報誌編集係
TEL (078) 341-5897
FAX (078) 341-8239
E-mail: kouhou@kbshinsei-j.org

○振替口座
郵便振替01100-8-18680

評議員を拝命して

神戸真生塾 評議員
関西学院大学
人間福祉学部 学部
芝野松次郎

昨年、評議員を拝命しました芝野松次郎でございます。

関西学院大学で勤務し始め四半世紀が経ちました。長く社会学部社会福祉学科におりましたが、一昨年新たに人間福祉学部が設置され、移籍いたしました。所属の社会福祉学科では、子ども家庭福祉や社会福祉実践モデルの研究開発をテーマに取り組んでおります。

さて、私と神戸真生塾との関わりは二十年以上になるかと思います。実習生の受け入れをお願いに何度か訪問させていただきましたし、前理事長の今井鎮雄先生のお勧めで、「ロータリー子どもの家」において提供するプログラム作りに関わらせていただいたり、当時はまだそれほど多くなかった親支援のプログラムを先駆的にさせていただいたりと、振り返ってみますと、真生塾とはいろいろと接点がありました。

なかでも百周年の折に、シンポジウムをさせていただきましたことを、当時の緊張感とともに思い出します。阿部先生の滑らかで、説得力のある基調講演に続き、まだ助教授であった私は、大変緊張し、上がりっ放しでした。お恥ずかしいことに、そのときに何をしゃべったのかを今はもう覚えていないのですが、大変名誉な機会を与えていただいたということだけはしっかりと記憶しております。

その名誉な機会を二十年後に再びお与えいただけるとは、想像もしておりませんでした。創立百二十周年のシンポジウムに参加するようにとのお誘いをいただきました。再び大きな緊張感を覚えましたが、昨年の四月、パネラーの一人としてなんとか大役を果たさせていただきました。上がりっ放しは、二十年前とまったく同じでした。違っていましたのは、阿部先生が、今回はコーディネーターとしてシンポジウムをリードされました。流れるような口調で、パネラーの長所を引き出してくださいましたが、私の場合は、それにうまく応えられたかどうか、忸怩たる思いであります。

シンポジウムのタイトルにもありますように、これまで日本の社会的養護を担ってこられた神戸真生塾は、児童福祉と社会的養護を地域に拓くという新たな役割を担うことが期待されています。児童養護施設に入所する子どもたちの半数以上が家庭において虐待を受けたことのある子どもたちです。また、超少子化の中で次世代の育成が地域の重要課題となっている今日、地域における子ども家庭福祉の拠点として児童養護施設が、その存在価値を社会に向かって説明するためには、施設として何が、どのようにできるのか、そして、その結果として子どもたちの成長と人としての権利を護ることができるのかが問われています。

以前『社会福祉研究九〇号』(鉄道弘済会二〇〇四年)に、このテーマに関連づけて少し書かせていただいたことがあります。当時配置された間もない家庭支援専門相談員の役割について私案を述べさせていただきました。児童養護施設は、社会的養護を必要とする子どもたちの最善の利益に配慮し、その「育ち」を援助する場として、極めて重要な場であり、歴史的にみても大きな貢献をしてきました。しかし、家庭支援専門相談員配置の趣旨にも見られますように、家庭や地域における子どもたちの成長を長いスパンと広い視野で見るとき、子どもの成長にとって必要な地域資源をマネジメントすることが、地域における児童福祉の基幹施設である児童養護施設には求められています。

次世代育成支援における地域子育て支援センターが子育ちと親育ちを支援するために最も必要な地域資源を最も必要とされるときに提供するマネジメントをおこなうように、保護を必要とする子どもたちの育ちと親の育ちを支援するために最も必要なときに最も必要とされる資源を提供する役割を担うのが児童養護施設であると思うのです。児童養護施設は、その蓄積された和と技術によって地域子育て支援センターの役割を担うことも可能であるとすると、ますます、基幹施設すなわち地域拠点としての期待が高まります。

そうした児童福祉基幹施設としての神戸真生塾の評議員を仰せつかりましたことは誠に名誉であると思いますとともに、身の引き締まる思いを感じつつ、頭書を締めくくらせていただきます。

《乳児院 真生乳児院》

七五三

晴天に恵まれた十一月十九日、毎年恒例の七五三に皆揃って可愛く正装して、生田神社にお参りに行きました。

今年は、乳児院の職員が一対一で付き添うのではなく、保護者の方々に付き添っていただきました。お母さんやお父さん、家族の方々に手を繋いでもらって生田神社に向かう電車の中でも、参拝への期待と緊張の様子が伝わってきました。

生田神社に着くと、お参りをされる保護者の方の真似をして手を合わせる姿や、小太鼓を一緒に打ち合わせる様子はとても可愛く輝いていました。

参殿に入ると外部とは異なり、静まり返った凛とした空気が流れていました。子どもたちがこうした中で祝詞の間、おとなしくしていられるかどうか不安でしたが、子どもたちはしっかり一人一人座り、神主様の祝詞、元気に育ったお礼、これからも元気に育つようにとのお祓いを静かに受けていました。その姿に、こんなに大きくしっかりと育っていることに感銘を受けました。保護者の方々も同じ思いでおられたようで、「賢くできたね」と頭を撫でておられました。お札やお守り、千歳あめ、玩具をいただくときも、「どれがいいかな？」「車が好きかな？」と、お子さんの気持ちをゆっくりと聞かれていました。

今年は、『幼い子どもの心豊かな育ち応援助成金』をいただき、七五三の記念撮影に使わせていただきました。

写真館では、保護者の方が衣装を選ばれ、子どもたちの可愛い姿に大感激されていました。子どもたちははずかしい気持ちの中にもうれしさを隠しきれなく、保護者の方と一緒に大満足の笑顔で写真撮影を終えました。保護者の方々は「とても良い機会をありがとうございました」とおっしゃっていました。

この度は、子どもたちにとっても、とてもいい記念写真となりました。

これからも、家族とのつながりを大切にした援助ができればと思っています。

うさぎクラス
担当保育士　伊田愛玲

《児童養護施設 神戸真生塾》

パン作り教室

普段、厨房と子ども達との親密な関わりが持てなくて、距離感を以前から感じており、何とか親密な関わりを持つ為に厨房でしかできない「簡単パン作り教室」を、開催することにしました。

第一回目は十月十一日、小学六年生だけで男児二名、女児四名の計六名と、厨房からは二名が指導者として入りました。

初めての試みなので、当日の朝、子ども達が本当に来てくれるのか不安でいっぱいでしたが、開始時刻十分前には、六名全員来てくれました。

Aちゃんが

「お姉ちゃん今日は、どんなパン作るの？　ちゃんと食べられるパンなん？」

と聞いてきました。

「テーブルパンとウィンナーパンをつくるよ。ちゃんと食べられるパンだから一緒に作ろうね」

と話して子ども達の顔を見て私達の緊張もほぐれました。

エプロンと三角巾をつけ手を洗いテーブルの前二人一組になってもらいました。

「じゃあ、前に置いてあるビニール袋に強力粉二五〇グラム計ってね」

「測りのスイッチは、どこ？」

「この臭いのも入れるん？」

など、皆、わいわいがやがやと話しながら、何とか醗酵までこぎつけました。

少し休憩しながらM君が

「パン作るのって大変だ～ほんまにちゃんとしたパンが焼けるのかな～」

って少々お疲れモードでした。

しかし、膨らんできたパン生地を見て皆一斉に

「うわぁ～すごい膨らんできたー」

と大喜びでした。

「さあ丸めて好きな形を作って焼きますよ」

と声をかけたら、Nちゃんはネコ・リボン・アルファベット。A君は車・くねくね棒って何だろう？と、色んな形が出来て、オーブンで焼くこと十四分、美味しそうな匂いで焼き上がりました。

「早く食べた～い」

「自分で作ったパンは格別の味や～」

って喜んでくれました。

子ども達と一緒にパン作りをして、子ども達の豊かな想像力には驚かされることばかりで、この感性は大事にしていきたいです。

また、お菓子作りで楽しい時間を過ごしたいと思います。

（高木）

フットサル大会第三位 ～子ども達から学んだこと～

去る十一月十四日、神戸市児童養護施設フットサル大会が行われました。今回の大会は小・中学生混合チームでの参加となっており、神戸真生塾からは小学生三名・中学生六名が出場しました。出場を決めた当初はそれぞれのやる気に溢れていましたが、中学生は部活や塾などで忙しくて思うように練習の時間がほとんどないまま、「練習してないのに勝てるわけがない」「どうせ負けるわ」と半ば諦めムードが漂う中で試合当日を迎えました。当日は神戸真生塾の期待の星、サッカーのクラブチームにも所属しているキャプテンのK君が選手宣誓の大役を立派に努め、何かやってくれるのではないかという雰囲気が漂っており、その良いムードのままチームは二戦二勝で予選リーグを見事勝ち上がりました。余裕を持って決勝リーグに勝ち上がった子ども達でしたが、決勝リーグに名を連ねた他のチームは強敵そろいで一試合目で格の違いを見せつけられてしまい、思うような試合展開にならなかった事もあってか、予選リーグではとてもよかったチームワークも少し乱れ、惜しくも負けてしまいました。

以前であれば一度負けると子ども達のやる気が途切れてしまい建て直しがきかずにズルズルと負けてしまう事もありました。しかし絶対に勝ちたい！メダルを取りたい！という子ども達の中の熱い想いは途切れることなく、この大会が最後となる中学三年生の子ども達が小学生達に檄を飛ばして気持ちを盛り上げ、三位決定戦では素晴らしいパス回しや華麗なシュートの連続で見事勝利し三位になる事が出来ました。

閉会式で三位のトロフィーとメダルを受け取る子ども達の姿を見ていると、諦めずに最後まで頑張ることの素晴らしさを改めて感じる事ができ、子ども達への感謝の気持ちで胸が熱くなりました。

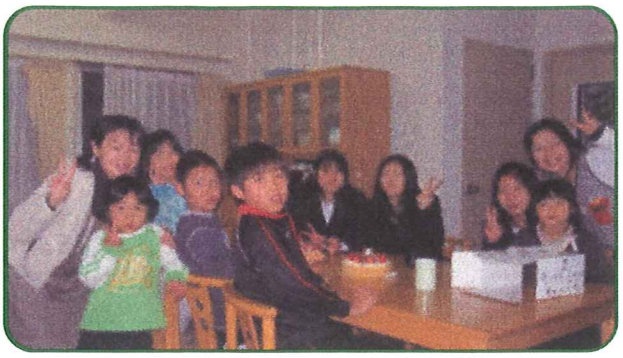
大会が終わってから小学生の子ども達は幼児に優しくサッカーを教え、「大きくなったら一緒に大会出よな！」と話していました。

フットサル大会を通じて、子ども達が得た素晴らしい体験が小さな子ども達にも受け継がれていく事をこれからも見守っていけたら・・・と願っています。

（金岡）

《児童養護施設 神戸真生塾》

クリスマス食事会



去る十二月二十四日の夕方から子ども会（職員三名と幼児から高校生の子どもたち代表十名で結成し施設内での行事の一部を立案している会）のメンバーが中心となり、クリスマス食事会を行いました。

食事会を行う約一ヶ月前から子ども会のメンバーで何度か話し合いの場を設けました。

「クリスマス食事会のメニューはどうしようか？」と職員が問いかけると、子どもたち全員からアンケートをとろう」「アンケート用紙は作らせて！」等々色々とアイディアが出てきました。

アンケートの結果、メニューはから揚げ、ピザ、フライドポテト、おにぎり、サラダ、ミネストローネと決定しました。

食事会は、子どもたちと職員を六つの班にわけ、各部屋で会食を行うことにしました。

当日、子どもたちのアンケート結果を踏まえて栄養士さん方が腕を振るって食事を作って下さいました。それに加えて、寄贈でいただいたホールのクリスマスケーキ、子ども用シャンパンも並び、子どもたちは大喜びでした。

食事会中は二十五日に控えたクリスマス祝会のこと、学校でのこと、サンタさんから何をもらうか等々話題は尽きず、とてもにぎやかな会となりました。

この場をお借りして、子どもたちがクリスマスを迎えるにあたり色々と寄贈してくださいました皆様に、お礼を申し上げます。

（福田）

クリスマス祝会

二〇一〇年のクリスマスも皆様方と共にイエスキリストのご降誕をお祝いすることができて感謝しています。

クリスマス祝会にお越しいただいた方はご存じと思いますが、毎年、神戸真生塾の子どもたちによってイエス様のお誕生を祝う聖誕劇が行われます。今年度は、幼児と小学生の有志が演じました。

「今年も劇をするやろ？」

「去年は〇〇の役をしたから、今年はもうやめとくわ！」

「〇〇の役がしたいわ！」

など、子どもたちからの色々な声が聞こえます。

練習も正直、たいへんです。一生懸命練習をする子もいれば、ふざけて走り回る子もいます。練習の始まりと終わりには、神様にお祈りをします。そこには自分自身と向き合う子どもの姿があります。その繰り返しから、子どもたちそれぞれが自由に歌い、自分なりの台詞の伝え方ができ上ってきます。

皆様方に上手にでき上った劇を披露したい。その気持ちが膨れあがると、子どもたちに必要以上に厳しい練習になり、私たち職員も自分自身を見失いがちです。しかし上手に演じることが大切ではなく、気持ちを込めてお届けする。それが大切なのだということを、子どもたちと共に職員も学んで行きます。

聖誕劇終了後の子どもたちの姿は、緊張からの解放感。役割を果たしたという自信。そんな表情が見られます。

これからも子どもたちと皆様方と一緒に、イエス様の誕生をお祝いできますことを楽しみにしています。

（網谷）

感謝の気持ち

中三　山口　祐希

「神戸真生塾」、僕がこの施設にお世話になって、早十数年が経ちました。

昔はプランクトンのように小さかった僕が、この春からは高校生です。篠山東雲高校で農業の勉強をします。

人間は決して一人では生きていくことはできません。僕がここまで成長できたのは周りの人たちや学校の先生、施設の職員の方々（お兄さんやお姉さん）の支えがあったからこそです。

竹原兄、網谷兄、毛利兄、金岡姉、寺岡姉、そして富川施設長さん、特にこの六人の方々にメッセージと感謝の気持ちを、伝えておきたいと思います。

竹原兄、「オタケ」とは長い付き合いになりますね。小柄だが力が強く走りも速い、まるで『こち亀』の『両さん』みたいです。時々、本気になれば四十歳のおっさんとは思えない速さで走りますね。あの走りを「電光石火」と呼ぶのでしょうか、これからもおっさんの底力を維持されてお仕事をされますように。ぼくも篠山で頑張ります。

網谷兄、「アミッチ」も長い付き合いになりますね。アミッチとは『ガンダム』についての話がよく盛り上がりました。僕は戦闘シーン派ですが、アミッチはストーリー派でしたね。なぜストーリー派だったのか今でも疑問を抱いています。

毛利兄、「モーヤン」は、幼児の時（三歳前後）の僕は何を言っているのか分からなかったそうですが、そんな僕を気長に育ててくれましたね。感謝です。

金岡姉、姉さんには特にこの一年間、お世話をかけました。受験勉強にいつまでも身が入らない僕を、何度も真剣に叱ってくれましたね。最後に僕がやる気を出すことができたのは、金岡姉が居たからです。ありがとう。高校生になっても、また、時々叱って下さいね。

寺岡姉、姉さんは、朝が弱い僕を本気でたたき起してくれましたね。あのとき、僕は天界へ旅立つところでしたよ。でも、おかげで遅刻せずに登校できました。感謝しています。

最後になりましたが、富川施設長さん、施設長さんには電卓でも数え切れないほど、お世話になりました。何とお礼をしていいのやら。でもこれだけは伝えたいです。「今まで本当にありがとうございました。これからも迷惑をかけるかもしれませんがよろしくお願いします」と。

今まで僕を育ててくれた乳児院の保育士さんや看護師さん、養護のスタッフの方々、ありがとうございました。

皆さんの支えに報い、僕自身のためにも、僕は篠山の農業高校で頑張ります。そしていつの日か、僕が作った野菜を塾に届けます。もちろんジンガー（中村兄）にも。

真生塾の思い出

中三　大谷　浩司

僕は物心つく前から神戸真生塾に居ました。物心がつき始めた頃には、真生塾に居ることがあたりまえだと思っていました。今もその考えは変わりません。しかしあと一ヶ月ほどで、僕の生活は大きく変化します。四月から、播磨農業高校での寮生活が待っているからです。

振り返ると小さい頃から今の中学三年生まで、長かったり短かったり感じられます。

幼稚園に通っていた頃は、一言で言いますと、「乾姉さんを困らせた時期」です。小さい頃の僕は、あちこちと動き回り何でも興味を示し、よく考えずに思ったことはすぐ行動に移していました。だから真生塾でも幼稚園でも、お兄さんやお姉さんそして先生方を困らせていたものです。その中でも、僕が一番困らせたのは乾姉さんです。よく叱られていた僕は、叱られているのに笑ってしまう癖がありました。自分自身でも困ってしまったものです。けれど乾姉さんに叱られる度に僕は反省をしました。そのおかげで今のぼくがあると思います。もうすでに退職されていますが、乾姉さん本当にありがとうございました。

小学生の頃のいっぱいある思い出から二つのことを書きます。

一つ目は真生塾の新築工事です。新しく生まれ変わる前の工事は、文字では書き表わせないほどすごかったです。新築の部屋に入った一日目で四人部屋の網戸を壊してしまい、オタケ（竹原兄さん）に早速怒られてしまいました。小二の時でした。

二つ目は、小学生フットサル大会での優勝です。

真生塾の中庭で毎日のようにサッカーの練習をしました。中学生の先輩と選手である僕を含めた小六の五人と小五の一人で対戦し、いつもコテンパンにやられました。「こんなんやったら一回戦で勝つのも無理だ！」言われながら厳しい練習が続きました。でもその中学生の先輩たちのおかげで優勝することができました。

中学生の時は、中三の秋まで柔道に明け暮れた僕でした。そして今年の二月、推薦入試で播磨農業高校にパスしました。

高校では農業を勉強し、将来、若者たちによる農業経営を実現したいです。そして、真生塾でお世話になった方々に、恩返しをしたいと思っています。

《子ども家庭支援センター
ロータリー子どもの家》

子育て元気アップ講座

近年、子どもへの虐待は社会的にも大きな問題となっています。その背景として、核家族化、少子化、社会からの親の孤立化などが考えられます。

社会からの孤立と虐待防止等のため、育児の疑問や悩み等を気軽に相談できる場や保護者同士が楽しく交流できる場が、今、求められていると思います。

そのため、「ロータリー子どもの家」では、子ども家庭支援センターの事業の一つとして『子育て元気アップ講座』を実施しています。

元気アップ講座は、就学前の子どもがいる保護者を対象に、子育てを応援するプログラムです。

講座には、保護者だけが参加するものと、親子で楽しむものの二種類があります。保護者だけの時には託児を設け、保護者の方が安心して講座に参加できるようにし、日々の子育てから一時離れ、リフレッシュされることを目指しています。

参加された方々から好評だった講座をいくつかご紹介します。

まずはじめは「料理教室」です。地域でボランティアとして活動している栄養士の方たちが、簡単に作れる料理を毎回、紹介してくれています。参加者からは、「料理教室に通いたくても幼い子どもがいるとなかなか行けないので、助かります」という声や、「でき上った料理を子どもたちが『おいしい！』と笑顔で食べてくれ、普段より多く食べていることに驚きます」という感想をいただいています。

次に「磯遊び」は、悪天候で中止になると参加者の方々から「残念です！」とのお声が多く、振替日を設けるほどの人気があります。講師の先生が捕まえたタコ、アメフラシなどを見たり触ったり、海で泳ぎの練習や水遊びを楽しんでいる子どもなど、生き生きとした子どもたちの姿に保護者の方々も満足そうでした。その他このような野外での活動には、芋の苗植え等があり、父親の参加も多く見られるようになってきました。

刺繍など「もの作り」のプログラムもあります。お母さん方は一つの作品にチャレンジしながら、お互いに子育てや趣味などの情報を、穏やかな雰囲気の中で交換されています。終了後に「久しぶりにゆっくりできました」とのお声をいただきました。

最後は、講師を招いて子育ての話を聞く講座です。子育てに関するテーマを設定し、日々の子育ての中で役立てるような講座を提供するように心がけています。

今後も、同年齢の子どもを持つ親自身が講座を楽しみながら交流できる場を提供していきたいと思っています。

（立川裕佳）

《保育所 真生きらきら保育園》

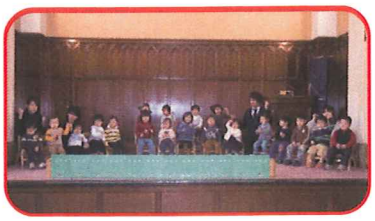
クリスマス会

クリスマス会で見ていただいたページェントでは、ただセリフを覚えるだけではなく、どうしたらセリフや讃美歌を見ている人に伝えることができるかなどを考えながら取り組んでいきました。

みんなの前で演じることに恥ずかしさや緊張を感じていた子どもたちも徐々に自信をもち表現する姿が頼もしく思えることもありました。当日は沢山の人に見ていただき、きっと緊張していた中、演じることができていたと思います。（四・五歳児クラス担任：廣瀬加恵）

初めてのクリスマス会はあの大きな舞台の上で緊張しながらも泣かずにいた子どもたちには、大きな拍手をおくりたいです。みかん組（二歳児）の影響もとても大きく、当日を迎えるまでには座席を色々変え、みかん組とのバランスを考えました。少しドキドキしていても、堂々とした姿をみると自然と笑顔になったり、体を揺らしたりすることが増えてきました。

「ももさん（一歳児）もやってる！」とみかん組が一言いってくれると、その一言が励みになることもあり、思わず吹き出してしまうようなことも何度かありました。子どもたち同士の不思議な力だなあと思います。（一歳児クラス担当：山口郁恵・松井薫美）



生活発表会

『十一ぴきのこやぎ』を演じたぶどう組（三歳児）は、恥ずかしさや、緊張している姿もありましたが、一生懸命に声を出したり楽しんでいる表情は、ぶどう組らしさが出ていたのではないかと思います。

はじめは、一つひとつのあそびから、ごっこあそびに広がって、最後には役になって楽しむことで、劇あそびの楽しさを少しは感じてもらえたのではないかと思っています。保護者の皆さまにも子どもたちの可愛い姿、楽しんでいる姿をみていただけたことと思います。（三歳児クラス担当：藤原美智子）

日頃の保育のなかで、みかん組の「わらべうたあそび」に取り組む子どもたちの姿は、いつも目がきらきらしていました。楽しいことを最高に楽しむクラスだと、改めて私たち担任も実感しました。

四月からのいろいろな活動や生活を振り返ると、できることが少しずつ増え、そのたびに心から喜ぶ子どもたちの姿がありました。どんなことにも興味津々で、大きくなったことを本当に嬉しく思います。生活発表会では保護者の皆さんにその様な姿を見ていただくことができました。（二歳児クラス担当：花畑槙一・藤原陽子）

楽器あそびは、ピアニカが大好きだっためろん組（五歳児）の『メリーさんのひつじ』。この曲も積極的にチャレンジしていました。

今回は薬指以外の指を使って、指づかいを意識して取り組みました。最初は自分のしやすい指で弾いてしまいがちだった子も、最後は音に合った指を使いながら弾くことができるようになりました。

また、それを見ているりんご組（四歳児）は、リズム打ちに挑戦。二つのリズムに分かれてしましたが、練習ではついついつられてしまうこともありました。しかし最後の方では、教え合ってできるようになりました。

保護者の方のアンケートのなかにも「一番感動しました！」と、暖かいメッセージがありました。（四・五歳児クラス担当：廣瀬加恵）

皆様のご意見、ご要望をお聴きしています。

神戸真生塾苦情処理委員会

苦情受付担当者　難波美智子（子ども家庭支援センター センター長）
森　みずき（真生きらきら保育園 主任保育士）

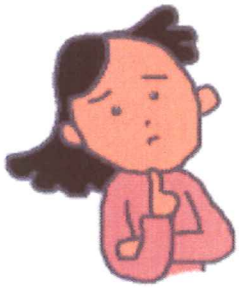
苦情解決責任者　富川　和彦（児童養護施設 神戸真生塾 施設長）
綿谷　榮子（乳児院 真生乳児院 施設長）
上杉　　徹（真生きらきら保育園 園長）

第三者委員　森光　規之（当法人 監事）
中村　悦子（主任児童委員 中央区山手地区民生委員児童委員）

苦情受付件数　平成２２年度（１１月より２月末まで）　１件

子育てに困った時は先ず電話！

毎日、午前9時～午後6時、緊急のご相談は夜間もOKです。



ロータリー子どもの家は、児童福祉法に基づく児童家庭支援センターとして、神戸市から認可を受けています。

二〇〇五年度の四月より、従来の活動とともに、子どもと家庭についての専門相談機関として、働いています。

子育てホッとライン（相談専用）

TEL.078-341-649

神戸真生塾子ども家庭支援センター
（ロータリー子どもの家）

Homepage　http://www.rotary-kodomonoie.org/

《編集後記》

早いもので、広報誌係を担当して、もうじき一年が経とうとしています。来年度も本誌を通し、こどもたちの成長ぶり等、さらに充実した内容をお伝えできるよう努めたいと思います。（山本）

係の皆さんにご迷惑ばかりかけてしまいましたが、記事を集める大変さや集った時の嬉しさを感じることができました。ありがとうございました。（上田）

七五三のとき写真館での撮影が楽しかったのか、「シンデレラに変身したなあ」と今も嬉しそうに話します。子どもたちにとって、とても思い出に残る機会を与えていただき感謝しています。（藤原）

皆さんにお願いした記事を読みながら、一年の月日の移り変わりを感じ、乳児から養護に至る子どもたちの成長を感じました。皆様、ご協力のほど本当にありがとうございました。（有吉）